

るの は な

編集兼発行者

千葉大学医学部

るの は な 同窓会報編集部

〒280 千葉市亥鼻1の8の1

千葉大学医学部庶務係気付

電話千葉 (0472) 22-7171 内線2012

千葉大学医学部同窓会報 第75号 題字 鈴木 五郎

伊藤健次郎教授(第一外科)

退官記念式典開催さる

医学部第一外科、伊藤健次郎教授には、本年四月一日付で定年退官にともない、去る三月十五日(土)午後一時より医学部記念講堂において、退官記念式典が開催された。式次第は、井出医学部長の挨拶に



はじまり、次いで香月秀雄学長、学会代表田中大平元東大教授、小林金市千葉県医師会会長、宍倉安衛第一外科同門会長が祝辞、宮内好正助教授の謝辞があり、記念品・花束の贈呈に続いて主賓の伊藤教授の挨拶があつて記念式典は終了した。

続いて暫時休憩のあと千葉大学名誉教授望月衛氏の「環境と人間」と題する記念講演があり、その後同講堂のホワイエで医学部主催のパーティーがあり、同教授の四十年に及ぶ教官としての労苦をねぎらつた。

小林龍男名誉教授 退官一〇周年記念講演 レジオンドヌール勳章受賞

小林龍男名誉教授が定年退官されてよりやく一〇年が経った。本学を去られてのち杏林大学教授をつとめられたがこれも任を果されて退官、現在は日佛医学会々長をつとめていられる。去る四月十二日(土)午後、薬理教室主催による記念講演会が開かれ、先生は

「思いつくままに」と題して現役当時とかわらぬ物やわらかい話しぶりで日佛医学交流の歴史を中心に一時間程語られた。村山教授の司会の言葉にもあつた如く、基礎医学教室の移転と共にやがて使われなくなるS。講義室でもう一度先生に話をしていたらこうとい

う含みもあった。井出医学部長の思い出を語る挨拶もまたよく、門下の萩原・久我・村山・石川各教授はじめ、永野教授・橋教授らの



顔もみえ盛会であつた。また小林夫人がお元氣に同席されたことも喜びであつた。

また四月二十一日(月)には、小林名誉教授が多年日佛医学交流につくされたことをたたえられ、フランスよりレジオンドヌール勳章(オフィシエ章)が贈られ、フランス大使館にてシエバルリー大使より伝達された。大使より詳細な功績説明があり、先生は流暢なフランス語で答辞を述べられた。その後ワインの盃をかかげて日佛両国関係者がしばしなごやかに交流した。

北京市近代病院協力専門委員会

本学附属病院を来訪

北京市に近代病院を造るための視察団が李宗權衛生部副部長を団長として来日、4月23日午後本学を訪れた。机上に両国旗が交叉する附属病院第一会議室に李代表は

「北京市に近代病院を造るための視察団が李宗權衛生部副部長を団長として来日、4月23日午後本学を訪れた。机上に両国旗が交叉する附属病院第一会議室に李代表は

か4名の視察団員、中国大使館より2名、外務省より1名、文部省より2名、計10名が見えたのは午後3時半、学長・学部長・病院長・事務局長・教官22名ほか事務官多数がこれを迎えた。

まず学長が、日本における千葉大学の地位、医学部の歴史などについて述べ、この病院は最新式の設備と機能をもっている、中国の近代病院のモデルとして参考になるであろうと挨拶、李代表は「北京に日本の知恵を貸して病院を建てるに当り、千葉大病院を見

せていただけるのは光栄である。日本の医学の長所を取り入れて、東洋医学と西洋医学を結びつけ、中日交友に貢献したい」と感謝の言葉を述べた。

ついで佐藤病院長がバンフレットをもとにして病院の概略を説明、続いて井出医学部長が、医学部の構成、医学の教育・研究システム、さらには亥鼻四部局についても言及した後、質疑応答が行なわれた。その場での中国側の質問の多くは建設費用、医療機械設備の模様、エネルギーについて等であつた。会見が終つてから院長の案内で病院内の視察が行なわれた。中国の新しい動向として注目されることである。

新会員歓迎会

— 謝恩会を兼ねて —

昭和55年3月24日(月)、体育館における卒業式、記念講堂における卒業証書授与式、記念撮影の後、県自治会館において恒例の、るの は な 同窓会新会員歓迎会が行なわれた。この会は従来あるのは同窓会が主催して行なわれて来たものであるが、ここ数年は卒業生側の申し入れにより謝恩会を兼ねることになって来ている。

今年も卒業生幹事の土田豊実君の司会によって会が進行した。卒業生の家族も加えた約百五十人の前で、小林金市同窓会会長、井出医学部長、佐藤病院長の挨拶に続き、出席各教官の一人一人から歓迎や激励の言葉が述べられ、盛会であつた。

第二外科 佐藤 博教授 日本外科学会

副会長当选

佐藤 博教授(昭和20年卒)には、四月二日仙台市で開催された日本外科学会評議員会において、副会長に当选された。昭和56年度に会長に就任し、同57年4月に第82回日本外科学会学術集会を運営されることになる。ちなみに副会長就任は、本学関係では中山恒明先生以来二回目、会長就任は、昭和28年故河合直次先生が同学会を運営されてから久しぶりで、誠に栄誉あることである。

るのはな山を離る日

さが
東京大学医学部教授
多田 富雄 (昭34年卒)



一昨年四月に、東大血清学教室に本務が移ってから、この三月まで二年の間千葉大環境疫学研・免疫研究部の教授を併任させて頂いていました。やっと住居を本郷に移したごく最近まで、ほとんどの日は千葉大に通っていたため、いまになってはじめてゐるのはな山を離る実感がしみじみと胸に迫ってきます。こんなわがままを許して下さった母校の諸先輩に、心からの感謝を申しあげ、また右のような事情から御案内をさしあげることなく過してしまいました。ことをお詫びいたします。

私は、千葉大学を昭和34年に卒業し、今年で21年になります。その間数年間の国外での生活を除けば、私の青春はすべてゐるのはな山で、あけられ、恩師の岡林名譽教授をはじめとして、よき先輩・同僚・後輩とともに過した日々を、生涯忘れるものではありません。馬杉教授をはじめとする千葉大学の免疫研究の伝統の一点にあずかせて頂いたのも、私の最も誇りとするとところですが、

と願っています。私もまた、もう一度新しいところで、苦渋にみちたもう一つの仕事をしようと思っています。

しかしそれにしても、私のハートが研究のためにほんとうにうち震え、私の免疫学を作ろうとビートしていたのは、このるのはな山の地下の研究室でしかなかったと思っています。去る二月に最後の免疫学の系統講義をしました。短い年月でしたが、全力投球の講義をしてきました。終つてから、これが千葉大での最後の講義だったことを話すと、学生諸君が立ちあがってしばらくの間拍手をしてくれました。少し涙が出ました。ゐるのはな山に埋めつくした私の青春に、最後のひとくちの土をかけ終つたような気がしたからです。

鈴木次郎先生

十三回忌開催

鈴木次郎教授が東京駅にて急逝なされたのは昭和43年1月11日であり、早くも12年の歳月が過ぎました。去る2月11日13回忌にあたり故人を偲ぶ会が興隆、御令息主催のもとに東京世田谷の三越シルバーハウスで行われた。総勢一四〇名に及ぶ先生の御友人・門下生・御親戚等が集まり、先ず相磯和嘉前千葉大学々長・岩原寅猪慶応大学名譽教授の挨拶の後に、井出源四郎医学部長による献盃がなされた。御列席の諸先生方による次郎先生の楽しい人間味あふれた思い出話

があり、整形外科同門会からは、井上駿一教授が代表として挨拶した。河邨文一郎札幌医大病院長の友情温まるお話は、ありし日の次郎先生の御姿を彷彿とさせるものがあった。

当日同門会より故人の友人であった山谷鉄一画伯による肖像画が偉子夫人に贈られ、会場の正面に飾られた。又同門の坂巻皓先生の説明で昭和30年次郎先生が偉子夫人と共に楽しくお遊びになつて居られる医局旅行の映画と、ありし日の次郎先生の約70枚に及ぶスラ

卒業二十周年記念 さんご会(昭35卒)開催さる

大学の桜も膨らみ始めた昭和55年3月22日(土)夕刻より、千葉市内「牧の家」にて卒業20周年を記念し、昭和35年卒業生の同級会(さんご会)が、三輪・小林・竹内・柳沢・北村名誉教授・井出学部長それに学生時代いろいろ御面倒をお掛けした大賀・井深・斎藤・青柳氏をお招きして盛大に行なわれた。

栃木より馳せ参じた大井・西川君、静岡より来た軽部・野口君を



イドの映写があり、同時の経つのを忘れ思い出に耽つた。尚、現在偉子夫人亡くは東京世田谷に、慶応大学整形外科に在籍し、昨年11月カナダの留学から帰られ次郎先

お互い苦笑することもあったが、何といつても同級生は気がねがいらず、いたるところで感嘆の声、爆笑の渦が湧くと云つた状態であることに楽しい一晩であった。なお席上、記念行事として、各自の現況報告の意味での記念アルバムが発行と大病院玄関前にさんご会にちなんだ珊瑚樹の植樹が発表された。二次会は「ミュンヘン」に席を移したが、ここにも大部分が出席し、生ビールを乾杯しながら学生気分に戻つて夜の更けるまで旧交を暖めた。

(増田善昭記)

「さんろく会」(昭和36年卒)

クラス会開催

昭和36年卒のクラス会、毎年3月第2土曜開催が慣例。今年は3月15日に、千葉駅に近いダリアサロンにて開催。出席者28名。青木謙、網代洪、石原運雄、稲葉和也、大川治夫、岡田信道、小倉敬一、小越章平、小幡五郎、北原敬二、国安芳夫、栗原正明、黒田健昭、諏訪部博、関幸雄、田部井徹、戸井道夫、成瀬幸月、松山輝男、生と同じ脊椎外科を専門とされ御活躍中である。御令嬢の雅子様は商社員である高氏と御結婚され既に2児の母として幸せな毎日を送つていす。会終了後御家族の方より千葉県下の身体障害児の為に金一封の御寄附がなされ、これを有効に使わせて頂いた事を書き添えます。守屋秀繁記(昭和42卒)

福田悦男、藤塚立夫、前島清、松下嘉一、松本一暎、松本生、吉野明昭、秋元富夫、遅れて、瀧上隆、中川康次、中島伸之氏らが出席。お互いに白髪や頭の毛の薄さを比較しながら談笑。学問の話、世界一級の研究だと自負する者あり、同席の者どもも酔いしれる。子供教育の話、学問などどうでもよい、ケンカに強くなければ駄目とか、親も野郎に負けないよう体を鍛えることと結論。税金の話、働く意欲消失。過疎の山村で活躍する立場。医療の原点に帰り、患者の立場になつて、物事を考えろと話す。一堂きいて。さすが、千葉大医学部卒業生。来年卒業20周年、記念事業を企画し散会。二次会「かも川」。

(諏訪部 博記)

金沢医科大学だより

教授 四家正一郎(昭26年卒)
教授 津金澤督雄(昭34年卒)

日本海側では、わが国唯一の私立医科大学として、昭和47年6月に開学した本学は、第一次石油ショック以来の打ち続く厳しい経済情勢の下で、様々な試練と曲折を経ながらも昭和53年3月には第一回の卒業生を世に送り、本年は第三回目の卒業式を挙行した。本学は古都金沢の北西に位置し、日本海と内灘大砂丘を背に、眼下に河北山を見下ろし、はるかに立山・白山の連峰を望む景勝の地にある。開学時にすでに整備されていた大学本部・進学校舎・図書館に続いて、解剖棟・体育館と整備が進められ、昭和48年5月には専門課程研究棟が竣工し、設備が整えられるにしたがって、翌40年4月から



日本海を背景にした学舎全景 右より大学病院、専門研究棟、本部並びに進学校舎、歯学研究所。

本学における専門課程の担当教員数は、現在、助手も含めて二百五十五名であるが、千葉大関係の教員としては、昭和49年に法医学講座の津金澤(昭34年卒)が、50年に解剖学第二講座の福山右門教授(本年三月で停年退職)と、吉田行夫助教授(昭44年卒)が、53年に小児科学講座の四家正一郎教授(昭26年卒)と微生物学講座の岡崎卓見助教授(昭42年卒)が、54年には小児科学講座の高橋弘助教授(昭42年卒)が順次着任している。(津金澤記)

津金澤教授が本学の紹介をされたので、筆者はその周辺について述べたい。本学も他の新設医大と同様、留年生の教育、国試対策など種々の問題が山積しているが、一歩一歩解決の道を歩んでいる。

学生は半数以上が全国から集っており、広大な駐車場に札幌や鹿児島ナンバーなどの自家用車が並ぶ様子は壮観である。裏日本という如何にも遠い陰気な地方を想像する人もあるが、最近冬の降雪も大した事はなく、筆者は東京の冬とあまり気温に差がないように感じている。春は雲雀の快い声で目ざめる。東京からは新幹線利用で5時間、日帰りも可能である。空路では羽田から小松まで一時間である。隣の宇の気町は有名な哲学者西田幾太郎博士の生地、現在西田記念館がある。金沢市内には犀川と浅野川の二つの河川が流れ、徳田秋声や室生犀星の碑があり、春夏の休暇を利用して全国から若者が集ってくる。此の頃は金沢駅は大混雑で、中心街の片町や香林坊も御多分にもれない。武家屋敷、忍寄寺等市内観光バスも満席である。加賀料理も乙なものである。大学から約一時間内外の距離に片山津・山中・山代・粟津・芦原・湯涌などの温泉地があり、医局旅行など順にめぐり歩ける楽しみもある。夏の内灘は結構暑く、能登半島周りに快適な水泳場が豊富にある。恐らく此の夏も千里浜海岸あたり混雑するであろうが、湘南の海のような「人の海」に較べると閑散としたものである。(四家記)

白兎会(昭17年卒)

卒後三十八年クラス会開催

わたくしどものクラスは、日本海軍が真珠湾を奇襲し日本が世界大戦に突入した翌年九月に半年繰上げ卒業、ほとんどの者が戦線に出征、八十三名卒業のうち二十三名が戦傷病死し、今六十名が生き残った戦中派であるが、感激的想い出も多く古き良き時代と自負するむきもある。戦後の困窮のなかで、なぐは学問に専念し得ず各地で地味な地区医療に奉仕する者

多く、豊島・窪田・西沢・梅沢・森島の諸氏が医療功労賞を受けている。

昭和二十八年以来一月十五日成人の日をクラス会の日と決め、以来二十数年一度も欠かすことなくクラス会を続け、この間クラス会誌三回、家庭アルバム二回発行し心のきずなは固くむすばれている。今年は千葉はてい屋に鈴木五郎先生・小林龍男先生・井出医学部

昭和三十一年卒クラス会

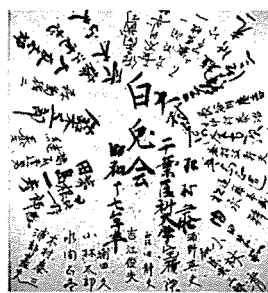
昭和三十一年千葉大学医学部卒業生のクラス会の三二会が昭和五十五年二月十五日に、昭和五十一年に卒後二十周年記念の三二会を開いてから久し振りに開かれた。

今回は一昨年新築移転となった母校の附属病院の見学を兼ねて行われた。千葉に近い人は時には来られる機会もあるが、丁度働き盛りの昭和一族の連中には、仲々新病院の見学もま、ならぬといったことから新病院見学が企てられた。病院見学可能な時間帯である午後三時から二時間、それも金曜日という週日を選んだにもかかわらず、三十名近い人が見学に参加された。病院は新しいが、どうも近代病院の魅力に乏しいというが感想であった。見学を終った時皆の口から異口同音に口をつ

いて出た言葉は、「旧病院を見にこう」であった。われわれの青春時代の四年間の学生生活を送り、現在の生活の糧となっている医学の基礎を勉強した古き、懐きき学び舎に、玄鼻台の中で最も強い郷愁を抱いたのは無理からぬことであろう。しかし旧病院は新しい研究教育棟として衣更えの最中で、足場で囲まれた旧病院を外側だけを見るに留まったのは、一同に一抔の不満と感傷を抱かせた。

夕方六時から、われわれの学生時代にも利用した、昔懐かしいほてい家に席をもうけ、四十五名の出席で、盛会にクラス会が開かれた。クラス定員が八十名であったから、金曜日という開業の人達には最も都合の悪い日であったにもかかわらず、大変よい出席率であった。

長をお招きし、出席会員三十一名にて卒業三十八回をさわやかに祝った。(数馬欣一記)



「寄せ書きは八年前の卒業三十年記念謝恩会のもですが、故松村先生、故河合先生の御筆蹟がございます」

った。美人のお酌や食事のサービスを受けつ、各人が現況報告を行った。卒業して二十四年ものつと、頭髮の具合からいっても、眼鏡一つみても、それぞれに年令を感じさせるようになった。しかし、それぞれに地についた生活振りがその話の中にかかれ、われ、各人の健在を喜び合った。なごやかな思い出深い宵を過ごすことができた。(山口 豊記)

沖繩のはな会

開催さる

小張一峰先生(昭和15年卒)を琉球大学にお迎えしたのを機会に去る昭和54年12月23日、沖繩不二ホテルで歓迎会を開催した。

全部で十名が参加し、古い千葉の話、沖繩の話などで、盛会であった。

長野県るのな同窓会総会

熊谷信夫(昭28年卒)

信大第一病理重松秀一教授(昭39)の就任歓迎と信大眼科塚原助教(昭36)の山梨医大への栄転祝賀をかねて、三年ぶりに計画されたるのな会長長野県支部総会が春浅い長野市のホテル国際会館で3月8日に開催された。本部からは井出医学部長・嶋田教授・奥井常任理事のご来賓をいただくことができた。賛助会員もふくめて128名のうち94名から返信があり、35名が出席予定であったが、高令会員は体調不良、働き盛りはオベや重忠等で、残念なことに最終的には29名の参加となった。

小林会員(昭19)の歓迎の辞、井出先生の乾杯で祝賀が始まり、杯を重ねながら、遅れて来られた嶋田教授(上田市出身)、奥井理事の挨拶、塚原・重松・小島(昭40信大寄生虫)教授の就任挨拶や今後の抱負をうかがった。森川会員

16時30分百瀬支部長(昭6)の挨拶と報告で総会が始まり、52年以降に逝去された萩江静男・柳沢光二・折井四郎・松井卓二・上条八男寿先輩の霊に黙祷が捧げられ武田幹事(昭18)より会計報告が行われた。つづいて重松教授の記念講演「腎炎の病理学的診断」が小西会員(昭23)の座長で開始された。沢山のスライドを用いての電頭による腎の基本的な微細構

信大第一病理重松秀一教授(昭39)の就任歓迎と信大眼科塚原助教(昭36)の山梨医大への栄転祝賀をかねて、三年ぶりに計画されたるのな会長長野県支部総会が春浅い長野市のホテル国際会館で3月8日に開催された。本部からは井出医学部長・嶋田教授・奥井常任理事のご来賓をいただくことができた。賛助会員もふくめて128名のうち94名から返信があり、35名が出席予定であったが、高令会員は体調不良、働き盛りはオベや重忠等で、残念なことに最終的には29名の参加となった。

日本学術会議について

第一生理 本間三郎(昭21年卒)

日本学術会議会員として、本学からは、第一生理・本間三郎教授(昭和21年卒)を送っており、三年毎に選挙が行われております。その度ごとに同窓生各位にご支援を頂いております。本年末にもその選挙があります。この際学術会議の使命について、説明して戴くことは有意義と考え、御執筆願いました。

各種委員会が審議された結果が政府への勧告、声明、要望となつて総会に提出されてきています。総会は今期あと一回残すのみとなりました。系統解剖に対する献体登録に関する法制化の促進に



(昭19)の歓迎の辞もあり、互に久闊を叙し、また同級生交歓をしているうちに時は流れ、百瀬支部長の恒例のマジックがでる頃にはタイムオーバーとなり、田中会員(昭12)の万才で盛會裡に散会した。(幹事熊谷信夫・昭28)

責務を述べた科学者憲章や核兵器の蓄積などによる脅威に対してラッセル・アインシュタインの宣言があつてからの二十五周年にさいして、改めてその宣言の普及についての声明を行いました。

学術会議が行う実務については科学研究費審査委員の推薦、特定研究課題やわが国で開催される国際会議の選定、日本学術振興会評議員や流動研究員等審査会委員候補者の推薦、国際会議代表者派遣の決定などがあります。これまで国際生物物理学会を開催し、来年は国際薬理学会が開かれる予定です。新しく活動を開始している学会や協会の登録審査が行われています。

学術会議には六つの常置委員会、十の特別委員会、四つの分科会があり、それら委員会が主催するシンポジウムとして先般新聞紙上を賑わした米國スリー・マイルアイランド原子力発電所事故の提起した諸問題に対する学術シンポジウムや学問研究の獨創性、先見性の啓発や発展途上国との事業協力問題などのシンポジウムがあります。

今期第十一期も本年で任期が終了しますが、目下その報告書作成委員会がその作業を進めております。活動報告書の題名は先見性のある科学・技術政策の確立のためにとなりしました。前期は転換期の科学・技術という題名であり、日本の科学・技術の有様を伝えた白書的なものでありました。今期は日本の科学・技術をどう転換するかの積極性をもり込んだものとなると思っております。

るのな同窓会 総会のご案内

日時 昭和55年6月21日(土)

午後4時

場所 錦糸町駅前ロッテ会館
電話 03(35)5021

総会

(1)会務報告

(2)議事

①昭和54年度決算

②昭和55年度予算

③会則一部改正

(3)その他

講演 房総半島の生いたちと
プランクトンの化石

千葉大学理学部教授
前田四郎

懇親会 午後6時 同会館内
会費 一万円(当日受付で)

春の
叙勲・受賞

〇三枝 敏氏(昭和3年卒)・79才
勲五等双光旭日章(学校保健・保健衛生)

〇関谷正一氏(大正13年卒)・78才
勲五等瑞宝章(人権擁護)

〇安藤健治氏(昭和9年卒)・76才
勲五等瑞宝章(保健衛生)

〇多田富雄東大教授(昭和34年卒)
ベリリング章受賞

「千葉大学新聞」について
生自治会委員長から左記のよう
な申し出がありましたので、お
伝えするとともに、千葉大医学
部同窓会への公報紙は「るのな
同窓会報」以外にはないこと
を申し添え、ご注意下さるよう
お願いします。

医学部長
井出源四郎
同窓会員各位へ
在中断されてお
り、これと全

同窓会の皆様へ、「千葉大学
新聞」と偽った広告カンパ行為
にご注意！
近頃「千葉大学新聞」を再刊
するということで、同窓会の皆
様の所へカンパや広告の依頼が
医学部の学生と称する者によつ
て行なわれているようですが、

この「新聞」は現在いかなる学
生の正式な団体とも、また医学
部とも無関係なものです。
この「新聞」は、勝共連合と
いう団体が発行しようとしてい
るもので、かつて千葉大学教養
自治会が発行していた「千葉大
学新聞」と同名ですが、教養自
治会のもは現
在、これと全

関係がありません。
大学ならびに学生自治会とし
ては、このような行為によつて
大学、医学部の名を傷つけられ
ることを恐れ、皆様に重々注
意下さるようお願いいたします。
学生自治会委員長 近藤克則